英語で対話できる生徒の育成の一方策

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　金　児　　正　史
教職実践力高度化コース　　実習指導教員　西　村　　公　孝
高　岡　　伊都子

キーワード：対話，聞くこと，母語，ティームティーチング

１．置籍校の実態

筆者は今年度当初，生徒の様子や英語の授業，学校の諸活動を参与観察した。また，英語の学習について，一部の現3年生（約16%）に無作為にインタビューした。参与観察や生徒のインタビューから，生徒が受動的に学習に取り組む場面が多く見られ，主体的に学習に取り組もうとしていない傾向が強いこと，生徒の考えを引き出したり，議論を通して考えを深めたりするような授業が少ないことなど，置籍校の言語活動に関わる学習活動について「生徒の課題」と「授業者の課題」が浮き彫りになった。これらの課題は，平成27年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査からも同様の傾向が読み取れた。

２．本研究の目的

置籍校の課題を受けて，本研究では，発表する場，話し合う場を継続的に設け，本授業の目標を「英語で対話できる生徒の育成を図ること」とした。

３．実験仮説

本授業は，置籍校の言語活動に関する課題を改善するために行う。そこで，本授業は仮説実験を検証する場であると考え，事前・事後調査，授業参観者やALTの感想・意見などを利用して，以下に示す仮説の検証を行う。

実験仮説：英語で対話に取り組む授業において，「聞くこと」を丁寧に指導すれば，生徒は相手の話の内容を適切に聞き取って，自分の伝えたいことや質問したいことを明確にすることができるようになり，英語の対話がしやすくなるだろう。

４．本授業の目標

実験仮説を受けて，本授業では2つの目標と1つの下位目標を設定した。

目標1：相手の話している内容をメモを取りながら聞くこと，話し手が話す速さを遅くすること，話の内容を繰り返し聞ける状況を作ることなどを通して，生徒に話し手の内容を捉えやすくする。このことで，話の全体の概要や内容の要点を適切に聞き取ることができる生徒の育成を図る。

目標2：自分の伝えたいことや質問したいことを母語で考え，それを英訳して，相手に伝えることができる生徒の育成を図る。

下位目標：正確な英語表現でなくても相手に伝わるという経験を通して，生徒に英語で「話すこと」に自信を持たせ，より正確な英語表現を用いて話そうとする動機を高める。

５．本授業の概要

5.1 本授業の概要

実施時期：平成28年9月13日～10月12日
対象生徒：第1学年107名（4クラス）
単元名「ALTと英語で対話しよう」

本授業は50分授業を部分的に活用して実践した。なお，本授業では，生徒の英語を聞くこ

と・話すことの興味・関心・意欲を高めたり，本授業の目標の達成を容易にしたりする指導の工夫として，① スピーチ内容の精選，② 母語で考えること，③正確な英語表現にとらわれず，相手に伝えることを優先すること，④対話を続けることの4つを，計画した。また，(1)発表する場，(2)生徒同士で話し合う場，(3)自ら考える場を継続的に設けた。

	時間	内　容
第1次	25分	日本語で対話の練習をしよう
第2次第1時	25分	ALTの「自己紹介」のスピーチを聞いて，スピーチに関連した質問を日本語で考えよう
第2次第2時	25分	日本語で考えた質問を英訳して，ALTと英語で対話しよう
第3次	50分	ALTの「ふるさと」のスピーチを聞き，ALT と英語でスピーチに関連した対話をしよう
第4次	50分	ALTの「趣味」のスピーチを聞き，ALTと英語でスピーチに関連した対話をしよう

6．本授業の実際

6.1 本授業　第1次（25分授業）

ALTと英語で対話する前段階として，生徒は，筆者の日本語の「高校での昼食時間」のスピーチを聞き，日本語でスピーチに関連した質問をして，対話の練習をした。その後，筆者とALTが，アメリカの高校の昼食について，英語で対話した。そして，対話を聞いた後で，生徒に対話の内容を確認した。最後にALTが対話の仕方「キャッチボール・カンバセーション」について説明した。

6.2 本授業　第2次第1時（25分授業）

ALTが日常会話の60%程度の速さで，「自己紹介」のスピーチを2回繰り返した。スピーチの内容確認後，ALTは，同じスピーチを，今度は日常会話の80%程度の速さで1回スピーチした。生徒各自にスピーチに関連した質問を，日本語で1つ考えて，付箋に書かせた。

6.3 本授業　第2次第2時（25分授業）

日本語の質問を英訳しやすくするために，ヒントプリントを配布したり，疑問詞をまとめた掲示物を黒板に貼ったりした。また，各グループに2冊ずつ辞書を配布した。ALTと英語で対話するにあたり，生徒には，ALTが生徒の質問に答えた後，必ず相づちを打ったり（I see. Wow! Really?），うなずいたりするように，また，聞き取れなかった時には，“One more, please.”のように聞き返すよう指導した。

6.4 本授業　第3次（50分授業）

ALTが日常会話の60%程度の速さで，「ふるさと」のスピーチを2回繰り返した。次に，生徒各自にスピーチに関連した質問を日本語で2つ以上考えて，付箋に書かせた。グループ活動では，グループで選んだ1つ目の質問に続く次の質問を考え，英訳し，ALTと英語で対話した。

6.5 本授業　第4次（50分授業）

ALTは「趣味」について，実際に自分のカメラや三線を見せながら，1回目は日常会話の60%程度，2回目は80%程度の速さでスピーチした。グループ活動では，グループで選んだ1つ目の質問に続く2つ目と3つ目の質問を考え，ALTと質問と応答のやりとりを3回以上となる対話をした。

7．本授業の分析

事後調査の生徒の自由記述，授業参観者の感想・意見，ALTの感想・意見を基にして，本授業を分析する。

7.1 目標1の分析

生徒の自由記述には，ALTのスピーチが聞き取れるようになったこと，また，英語が聞き取れるようになった喜びや意欲まで表現されている記述があった。聞き取れるようになったと記述した生徒は，対象生徒107名中33名いた。授業参観者の感想には，生徒が徐々に聞き

取れるようになっていったこと，聞き取れるようになって集中力が高まっていたこと，聞き取れなかったことに疑問を持って質問するようになっていたことなどを指摘した記述があった。ALT に実施した本授業直後のインタビューにも，生徒の聞き取る力の向上を実感している指摘があった。さらに，33 名の生徒の中には，聞き取れるようになったことだけでなく，目標 2 が達成できたことまで言及している生徒が 12 名も見られた。これらの分析から，筆者は本授業の目標 1 が達成されたと判断した。

7.2 目標 2 の分析

生徒の自由記述で，自分の伝えたいことや質問したいことを母語で考えられるようになったと言及している生徒は 7 名いた。授業参観者の感想には，本授業の学習活動を通して，生徒が，母語で考えてたずねたい質問を作ることができるようになったことを指摘した記述があった。ALT のインタビューには，生徒がまず母語で質問を考えることで，英語で多くの質問を作りやすくなっていることを実感している感想があった。

また，生徒の自由記述で，母語で考えたことを英訳できるようになったことに言及している生徒は 15 名いた。15 名の生徒の中には，生徒同士で話し合う活動が，英訳する際に有効であったと実感している生徒もいた。

さらに，生徒の自由記述で，自分の伝えたいことや質問したいことを英語で相手に伝えられるようになったことに言及している生徒は 34 名いた。34 名の生徒の中には，対話を続けられるようになったことに言及している生徒が 11 名いた。さらに，自分の伝えたいことを英語で ALT に伝えられたことに対する喜びを表現している生徒や，ネイティブスピーカーと英語で対話することにより，話す力がついたと実感している生徒もいた。授業参観者の感想には，生徒が，持ちうる英語の知識を駆使して，自分の伝えたいことを英語で伝えられるようになったことを指摘した記述があった。これらの分析から，筆者は本授業の目標 2 が達成されたと判断した。

7.3 下位目標の分析

生徒の自由記述で，英語で話すことに自信を持ったと言及している生徒が 13 名いた。また，正確な英語表現でなくても相手に伝わる経験ができたことに言及している生徒が 7 名いた。授業参観者の感想には，生徒の自分の英語の質問が通じたということが喜びや自信にもつながってきていることを指摘している記述があった。本授業を通して，生徒は英語を用いて話すことに抵抗感がなくなってきていることから，下位目標がある程度達成されたと考えることができる。しかしながら，より正確な英語表現を用いて話したいと言及している生徒は 2 名だけであり，本授業を通して，下位目標が十分に達成されたとは言い切れない。

8．本授業の考察

前章で述べた本授業の目標の分析を基にして，筆者は，実験仮説，置籍校の課題の 2 視点から考察する。

本研究の実験仮説については，分析結果から，生徒が ALT のスピーチを聞き取ったり，自分の伝えたいことや質問したいことを英語で伝えたりできるようになったと判断した。生徒が ALT のスピーチを聞き取れるようになった理由は，本授業における，次の 3 つの取り組みや工夫が有効に機能したからだと考えた。

1 授業の導入において，筆者が，生徒に本授業の活動内容を明確に示したこと。

2 ALTのスピーチ内容を，生徒にメモを取りながら聞かせたり，ALTが話す速さを状況に合わせてコントロールしたり，繰り返しスピーチしたりするなど，生徒がスピーチ内容を捉えやすくするための工夫をしたこと。

3 ALTが，生徒がスピーチに興味・関心を持ちやすいようなトピックを選び，スピーチの際に写真や小道具を用いたこと。

これらの取り組みや工夫によって，ALTのスピーチを聞き，その内容に関連した質問を考え，ALT と英語で対話するという目的意識を生徒に持たせ，生徒の聞き取ろうという意識や集中力を高められたと考える。生徒がALTのスピーチを聞き取れるようになれば，生徒は聞き取った内容を基に，自分の伝えたいことや質問したいことを考えやすくなったと推測できる。

一方，分析から，母語で考えて，英訳するという手順が身についていることもわかった。生徒が母語で考えたこと，それを英訳できるようになったことが相乗効果となって，英語で話そうという意欲につながった可能性がある。さらに，正確な英語表現でなくても相手に伝わるという経験が，生徒に「話すこと」に対する自信を持たせ，話そうとする意欲を高めたことも，生徒の話す力の向上につなげられたと考える。また，事前にALTに，生徒の英語表現の間違いを強く指摘しないように依頼した。その結果，ALTは生徒の質問をじっくり聞き，生徒の間違いに寛容に対応し，どの質問にも的確に返答してくれた。生徒が英語で話すことに自信を持てるようにする上で，こうした授業でのALTの適切な対応と協働が，有効に機能したと判断した。以上のことから，筆者は，本研究の実験仮説が，概ね検証できたと考えた。

筆者は，本研究の実験仮説が検証されたことで，置籍校の言語活動に関する課題も改善されたと考えた。置籍校の「授業者の課題」は，本授業の学習指導案を作成する段階から改善している。生徒の活動を重視する授業を計画することは，時間がかかることである。しかし，生徒が主体的に活動し，自ら考えていくような授業の立案に，私たち教師は多くの時間をかけるべきだと感じた。置籍校の「生徒の課題」についても，本授業の分析から，改善が見られていることは明らかである。このことから，生徒が主体的に学ぶ授業を実践し続ければ，置籍校の課題は大きく改善する可能性が明らかになった。

９．今後の課題と展望

9.1 今後の課題

本研究の授業実践における課題は，生徒にどんな力をつけさせたいかという目標が曖昧なまま学習指導案を作成し，授業を実践せざるを得なくなったことである。今後，本授業の修正と実践を改めて行う中で，「指導と評価の一体化」について再確認し，PDCAサイクルによる授業マネジメントに取り組みたい。

9.2 今後の展望

英語教育における今後の筆者の取り組みについてであるが，生徒に英語を学ぶことは楽しいと思わせる授業を行っていきたい。そして英語を用いて世界の人々を「おもてなし」できる力を身につけ，世界で活躍できる生徒を育てられるように，授業を改善していきたい。

今後の筆者の学びについてであるが，教職大学院での「教育実践力」，「自己教育力」，「教職協働力」の3つの領域に関する学びを今後も深め続けたい。その中でも特に「自己教育力」を高めていきたい。生徒とともに学ぶような，学び続ける教師でありたい。